埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

# 『言葉集』注釈（五）


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-03-27<br>キーワード (Ja): 和歌, 平安末期, 私撰集, 惟宗広言, 雑上部<br>キーワード (En): waka, late Heian era, shisenshu (personal collection of poetry), Koremune no Hirotoki, first half part of miscellaneous subjects<br>作成者: 穴井, 潤, 小林, 賢太, 中村, 文, 持田, 玲<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000076 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

# 『言葉集』注釈（五）

穴井　潤・小林賢太・中村　文・持田　玲

## 凡例

本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵『言葉和歌集　下』（冷泉家時雨亭叢書　第七巻『平安中世私撰集』所収、朝日新聞社、一九九三年）を底本とする翻刻本文を掲げ、それぞれの和歌について、【整定本文】【本文に関する注】【現代語訳】【他出】【詠出機会】【作者】【語釈】【補説】の各項を立て、適宜注を施したものである。歌番号は『新編国歌大観』第十巻所収『言葉和歌集』に従った。今回は雑上部231～237番歌を取り上げる。各歌の注釈の末尾に、それぞれの担当者を（　）内に示した。担当者は輪読時に報告を行い、四者による議論を踏まえて原稿を執筆した。注釈の内容については、各担当者が責任を負う。

翻刻本文は、改行等をも含めて、できうる限り底本の原態を残すよう努めた。虫損等で判読が困難な文字は□で示し、字体の推定が可能な場合には、□の右傍に「（○歟）」として示した。ミセケチ記号は「ヒ」に統一した。

【整定本文】詞書・和歌ともそれぞれ一行書きに改め、濁点・句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。判読が困難な箇所で推定が可能な場合には、推定した文字を示した。

【本文に関する注】重書や反転を指示する記号等、翻刻では示しきれない本文上の特徴について記した。

【現代語訳】できる限り本文に忠実な通釈を試みた。言葉を補った場合には（　）内に記した。

【他出】『言葉和歌集』所収の和歌が、他の文献（南北朝期以前）に見える場合に、これを示した。和歌作品に見える場合は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。それ以外の文献については、典拠を示した。

【詠出機会】当該歌が歌合・歌会・定数歌等の和歌行事において詠出されたものである（含推定）場合に、伝存する歌合本文や諸歌集などの資料によって知りうる情報を示し、参考文献を掲げた。

【作者】当該和歌の作者に関して簡略に解説し、参考文献を掲げた。

【語釈】和歌の解釈に必要な語句や、特に注意すべき事項に関する解説を示した。

【補説】和歌の作意や現代語訳には示しがたい含意、また、政治

社会など時代性との関連や和歌史上における意義等について記した。

なお、古典作品の引用に当たっては、韻文については特に注さない限り、『新編国歌大観』に、散文については、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』（以上、岩波書店）、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。表記等については改変する場合がある。

山家待花　　二条院左大臣

231　ヤマサトハコヌ人ヨリモハル□（ク歟）レハ
　　マツハナノミソコヒシカリケル

**【整定本文】**　山家待花　　二条院左大臣

ヤマザトハコヌ人ヨリモハルクレバマヅハナノミゾコヒシカリケル

**【現代語訳】**　山家待花　　二条院左大臣

山里では（期待しても）尋ねてこない人よりも、春が来ると、まずは待ち望む花だけが恋しいことよ。

**【作者】**二条院左大臣、未詳。

**【語釈】○山家待花**　山里で桜が咲くのを待つことを詠む題。当該歌以前には「あしびきのかたやまきしに家ゐしてみねのさくらの花まつわれは」（六条修理大夫集・一〇二「山家待花」）の作例が見える。「さくら花さかばまづみむとおもふまに日数へにけり春の山ざと」（新古今集・春上・八〇「白河院鳥羽におはしましける時、人人、山家待花といへる心をよみ侍りけるに」隆時）も顕季歌と同時詠だとすれば、白河院政期ごろに設題されたと考えられる。「はるながらたれかとひこし山里に花をまつこそ人を待ちけれ」（能因Ⅱ・一八「山家花」）、「はるやくるひとやとふともまたれけりけさ山ざとのゆきをながめて」（後拾遺集・冬・四一〇・赤染衛門）のように春・花を待つ心境はそのまま人の訪れを待つ心境に結びつく。**○ヤマザトハ**　「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」（古今集・冬・宗于・三一五）以来、山里は冬の寒さが厳しく人の訪れが絶えることを詠む。一方、「とふ人もあらじと思ひし山ざとに花のたよりに人め見るかな」（拾遺集・春・元輔・五一）のように春になると桜を求めて人が訪れる。「山家待花」はその中間の時期を想定していると思しく、冬の寒さは薄らいできたものの、まだ人の訪れもない頃と詠む題だと考えられる。**○コヌ人ヨリモ**　「わがせこがきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな」（拾遺集・恋三・好忠・八三三）のように、訪れない人と景物を対比して、景物の方がより心情を喚起させることを詠む。当該歌では、「来ぬ人―春来れば」の対比によって、山里ゆえに人の訪れが途絶えており、期待できない人よりも桜が咲くのが待ち遠しいことを表している。**○ハルクレバ**　「春たてど花もにほはぬ山ざとはものうかるねに鶯ぞなく」（古今集・春上・在原棟梁・一五）のように、山里では春の到来が遅く、それ故に前掲顕季・高時歌のように花を待ち望む気持ちが高まる。**○マヅハナノミゾコヒシカリケル**　まだ人の訪れが望めない時期であるため、まずは花だけを恋しく思うの意で、「先づ―待つ」が掛けられている。「ハナノミゾ」は、「むかしみしわがふるさとはいまもなほうのはなのみぞめにはみえける」（躬恒集・四四四）、「をる人もなきやまざとにはなのみぞむかしの春をわすれざりける」（斎宮女御集・二五一）のように、し

（二）

ばしば荒廃した居所に花だけが変わらずに咲くことを詠む際に用いられる。「コヌヒト＋マツ」は「こぬ人をまつゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ」（古今集・恋五・七七七）をはじめ、訪れぬ相手を待つ心情を歌う恋歌に用いられる表現である。当該歌では「人―花」を対比することで人の訪れない山里に花が咲くことだけを期待すると詠みながらも、「はなもかれもみぢもちらぬ山ざとはさびしさをまたとふ人もがな」（山家集・五五七）のように、人の訪れを待ち望む底意が窺われる。

**【補説】** 冬の山里での侘び住まいは訪れる人もいないため、春が来るとまずは待つ花が咲くことを願う。「先づ―待つ」の掛詞によって「待花」題を満たし、「来ぬ人―春来れば」の対比によって、人と違って春は訪れるために、花を待つという心情を導く。詠作主体が人の訪れを期待していることも含意するが、春が来たからといってすぐに人は訪れないと諦観しており、その期待を、開花を待つ心に託している。

作者は未詳。「二条院時代の左大臣」、すなわち藤原経宗と考えられるか。あるいは、「二条院中納言内侍」（玉葉集・雑四・二四〇三）なる人物も確認されており、「主人＋関係者の役職」と仮定すれば女房の召名かとも想像される。（六井）

山雲似花ト云心ヲ　　阿闍梨長覚

232　ハナカトテオリニキタレハヨシノ山
　　テニモカ、ラヌミネノシラ雲

**【整定本文】**　山雲似花ト云フ心ヲ　　阿闍梨長覚
ハナカトテヲリニキタレバヨシノ山テニモカ、ラヌミネノシラ雲

**【現代語訳】**　山雲似花というテーマを　　阿闍梨長覚
（遠目に）花かと思って手折りに来たところ、（それは）吉野山の――手に掛けることもできない――峰にかかる白雲であった。

**【作者】** 長覚。生没年未詳、天承二年（一一三二）以降に生まれ、文治六年（一一九〇）以降に没したか。六条家藤原顕輔男、後に伯父長実の猶子となる。異母兄に清輔・季経らがいる。久安二年（一一四六）六月三日に永厳の弟子となる。父顕輔の官位から三位阿闍梨と号す（『血脈類集記』）。覚性法親王が御室であった時期に仁和寺に住したか。祖父顕季が建立した最勝院（後の真乗院）を叔父の律師覚顕から譲り受けるも、後に仁和寺を離れ在家に交わったとされる（『仁和寺諸堂記』）。『尊卑分脈』に「歌人」と記されるごとく、勅撰集には『千載集』以下四首入集し、「重家卿家歌合」（承安五年三月）に出詠が見える。また、『文治六年女御入内和歌』二二一番歌左注には、季経の代作をした旨が記されており、六条家歌人の一員として活動したことが知られる。《参考文献》西村加代子「仁和寺和歌圏と顕昭」（『平安後期歌学の研究』和泉書院、一九九七年）

**【語釈】○山雲似花**　山にかかる白雲を桜に見立てることを詠む題。「花似雲」題は平安後期以降に多く設題されたが、「雲似花」に類する題は当該歌以外に見当たらない。「花→雲」の見立ては「桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲」（古今集・春上・五九・貫之）のように伝統的な表現であるが、当該歌や「おもかげに花のすがたを先だてていくへこえきぬ嶺の白雲」（長秋詠藻・二〇七）のような「雲→花」の見立ては平安後期に入って

からの新しい趣向であったか（【補説】）。**○ハナカトテヲリニキタレバ**　「ハナカトテ」は、色彩の類似によって花を雲・波・雪などの景物に見立てる表現。「はなかとてたづねきたればしらくものたつたのやまのこずゑなりけり」（広言集・一四「山家（花）をたづぬ」）は同趣である。**○ヨシノ山**　大和国の歌枕。山岳信仰と結びつき隠棲する地として見られる。平安後期に桜の名所として定着し、雪・霞・雲・桜を相互に見立てる。**○テニモカヽラヌミネノシラ雲**　遠景には桜に見えたが、いざ近づくと手で触れることができない白雲であったという趣向を詠む。花かと思って折ろうとしたものは「吉野山（の）峰の白雲」であったことを明らかにし、四句「テニモカヽラヌ」が挿入されることによって、それが桜と違って手で触れられないことを言語遊戯的に示す。また、「カヽラヌ」は「あじろ木のてにもかからぬ君により日をへて物をおもふ比かな」（林葉集・八七九）が「（君が）手にかからぬ―（氷魚が）かからぬ」の縁語を詠み込んでいるように、「（桜と違って）雲は手にかからない―峰に雲がかかる」という二重のイメージを形成する。峰には雲がかかっているので、「モ」は並列ではなく強意の意でとる。「あかずのみおもふ桜の花かとて心にかかる峰のしら雲」（別雷社歌合・七二「桜」公重）の下句と表現が似通うが、公重歌は桜を思うあまり峰にかかる白雲がまるで桜のように見えることを詠んでおり、「（心に）かかる―峰にかかる」が響いている。

**【補説】**遠景には桜に見えたので吉野山を訪れたところ、それは桜と違って手に取ることができない、峰にかかる白雲であったという歌。吉野山の花を雲に見立てるのは類型的な表現だが、当該歌では「くやしくも朝ゐる雲にはかられて花なき嶺に我はきにけり」（頼政集・五〇「遠尋花」）のように、花を尋ねて山中まで手折りにきたところ、花ではなく白雲であったと種明かしする趣向である。山にかかる雲を花に見立てる表現については「尋山花」題での詠歌が注意される。平安中期に詠まれた「しらくもにまがふさくらをたづぬとてかからぬやまのなかりつるかな」（金葉集・春・四二「ひねもすに花をたづぬといへることをよめる」貞亮）は伝統的な「花→雲」の見立てが用いられているが、前掲俊成歌が詠まれた「崇徳院近衛殿御幸歌会」（「遠尋山花」題）や、前掲広言歌や「はなみにといそぐ山ぢにいとどしく心さわがす峰のしら雲」（月詣集・二月・九九・顕昭）などが詠まれた「宰相入道観蓮歌合」（承安二年閏十二月）などになると、「雲→花」の見立てが用いられるようになる。ただし「尋山花」題には山風・木樵・岩道などとともに詠んだ歌も残っており、「雲→花」の見立ては山花の趣向を模索する中で生まれたパターンの一つであったと考えられる。また、すでに『為忠家後度百首』では「しら雲やみねのさくらとなりぬらんかからぬけふも色のかはらぬ」（一五「嶺上桜」為経）、「こころをしみねのさくらにひかはれていくさかゆくもしられざりけり」（一六・頼政）といった歌が詠まれており、前掲俊成歌はこれらの歌の影響のもとで詠まれたと思しい。既存の表現を逆転させた「雲を花に見立てる」という趣向は平安後期の「尋山花」題詠の中から生まれ、「山雲似花」はそうした趣向が認知された後に設題されたと推測される。なお、230～232番歌までは花が咲くのを期待する歌が配されている。

（穴井）

（四）

233　前大僧正宇治

ウ□（エ歟）ヲキシハナ、カリセハフルサトニ

ナニ□（ヲ歟）カタミニケフハオラマシ

**【整定本文】**　前大僧正宇治

ウヱオキシハナ、カリセバフルサトニナニヲカタミニケフハヲラマシ

**【現代語訳】**　前大僧正宇治

もし植えておいた花がなかったら、故郷に、一体何を形見に今日は留まって、何を折り取ることができようか。

**【作者】**覚忠。藤原忠通（法性寺殿）男。元永元年（一一一八）～治承元年（一一七七）。異母弟に九条兼実、慈円らがいる。近江園城寺の権僧正増智を師事し、保延四年（一一三八）に平等院執印。応保二年（一一六二）閏二月一日に第五〇代天台座主に任じられたが、延暦寺衆徒の反発で同三日に辞任。長寛二年（一一六四）大僧正、のち園城寺長吏。後白河院出家の際には戒師を務めた。応保元年（一一六一）に観音霊場三十三所を巡礼したことでも知られる。歌会活動としては、嘉応元年（一一六九）四月下旬頃、園城寺にて歌合を主催（『平安朝歌合大成』三七二参照）。本文の一部が『重家集』に見え、詞書からは清輔・頼政等が出詠したことが分かる。その他、『清輔集』に清輔との贈答が、『夫木抄』に歌林苑歌合で詠んだ歌が残るなど、当代歌人たちとの交流があった。『千載集』以下の勅撰集に一二首入集。《参考文献》井上宗雄『平安後期歌人伝の研究　増補版』第二章四「清輔年譜考」（笠間書院、一九八八年）

**【語釈】**〇**ウヱオキシハナ、カリセバ**　植えておいた花がなかったら。「うゑおく」の補助動詞「おく」は、その状態を続ける意やほうっておく意で、植えてからそのまま放置されて時間が経っていることが示されている。「なかりせば」の「ば」は、「す」の未然形接続で、順接の仮定条件。「うゑおきし」の早い例は、『躬恒集』（書陵部蔵本）二九五、『敦忠集』一五などがあり、勅撰集では『後拾遺集』が初出である。当該歌は、「うゑおきし花なかりせばよもぎふを何につけてか思ひ出でまし」（公任集・三）と上二句が等しく、参考にした可能性が高い。公任詠は、妹諟子の「うゑしよりしたまつものを山里の花みにさそふ人のなきかな」（二）の返歌で、北白川の公任の山荘の紅梅が咲いた際に、花がなければ山荘を何につけて思い出してくれるのか、と恨みを述べたものである。蓬生は、荒廃した庭園のことで、「うゑおきし花」が唯一山荘を思い出すものとして存在している。自らの山荘を蓬生と言ったのは公任の謙遜だが、荒れた土地を思い出すためのよすがとしての花は、当該歌にも共通する見方である。なお、公任詠の場合、公任自身が花を植えているが、当歌は、花を形見としていることから、植えた人は覚忠自身ではないと考えられる。具体的には、覚忠が花をよすがとして思い出している、故郷にゆかりのある人物が植えたのではないか。↓【補説】〇**フルサト**　花が植わっている場所であり、覚忠の古馴染みの土地である。詞書がないため、この故郷が旧都奈良に代表される歴史的な地であるか、詠者個人の故郷か、もしくはその両方の意味を持つのかは不明である。しかし、前掲したように、花が形見として残る地であることを鑑みると、詠者自身と植えた人とが馴染んだ場所であり、個人的な故郷の意味合いが強いと考えられる。故郷に咲く花を詠む

歌には、「人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける」（古今集・春上・四二・貫之）や「さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな」（千載集・春上・六六・忠度／故郷花といへる心をよみ侍りける）などが挙げられ、人の心が移り変わり土地の荒廃が進んでも、花は変わらず故郷に咲き続けている様を詠んでいる。これらの歌にある故郷の姿を参考にすると、当歌の故郷も、仮に花がなければ、昔の姿を思い出すことのできない地に変化してしまったことが想像される。→【補説】**○ナニヲカタミニ**　形見は、目の前にない、失った人や事物を偲ぶためのよすがとなるもの。当該歌は、花が、故郷と故郷に花を植えた人の形見となっている。『万葉集』には、「恋之久者（コヒシクハ）形見尓為与登（カタミニセヨト）　吾背子我（ワガセコガ）　殖之秋芽子（ウエシアキハギ）　花咲尓家里（ハナサキニケリ）」（巻十・秋雑・二一一九）とあり、花を形見とすることは古くからあったらしい。また、「むかしみし人の形見とをりつれば花たち花に袖ぞしみぬる」（堀河百首・夏十五首「盧橘」四五九・基俊）等、当該歌と同じく花を形見として折る歌も見られる。**○ケフハ**　「うゑおきし」の過去の助動詞「し」と対比関係にある。「今日は」とすることで、植えた時点からの時間の経過を含意している。**○ヲラマシ**　「…せば…まし」で反実仮想。「をる」は、「居る」と花を「折る」の意が掛かっている。荒れ果てた故郷で何を形見として留まることができようか、そして、何を折り取ることができるのか、と反実仮想を用いて、花が故郷の唯一のよすがであることを強調している。

**【補説】**「うゑおきし」は、初句に置かれる場合が圧倒的に多く、中でも「うゑおきし人…」と続く歌が多い。勅撰集の例では「うゑおきし人なきやどのさくら花にほひばかりぞかはらざりける」（後拾遺集・春上・九九・読人不知／桜をうゑおきてぬしなくなり侍にければよめる）や、「うゑおきし人のかたみとみぬだにもやどのさくらをたれかをしまぬ」（千載集・哀傷・五四七・範永／ぬしなき家のさくらをみてよみ侍りける）等が見出される。『後拾遺集』の歌では、植えた人は亡くなっても、花の匂いは変わらないという、時間の経過で変化する人とそのままに存在する花とが対比されており、『千載集』範永詠は、義忠の植えた桜を形見として、弔問の歌を詠んでいることが分かる。二首ともに、植えた人は既に失われており、その地には花が残っている。これは、【語釈】「フルサト」で掲出した貫之詠の、故郷や人の姿は変わっても、花は変わらずに存在するという詠み方と類似しており、「故郷・人」と「花」とを比較する詠み方が受け継がれていたことが窺える。当該歌は花が主格ではあるが、この背後には、故郷と花を植えた人への愛惜の念が込められているのではないか。

**【語釈】**「ウエオキシハナ、カリセバ」で掲げた『公任集』について、『新編国歌大観』本文（宮内庁書陵部本）では、二の詞書が「おなじ所に紅梅うゑたりつるにはじめて花さきたるにおはしたりけるに、女御の御もとに」とあり、二を公任、三を諟子の作としている。だが、榊原本をはじめとする諸本は「女御の御もとより」とあるため、作者は反対になる。この部分について、竹鼻績『公任集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇四年）では、「女御の御もとに」の本文について、「三とほとんど同じ歌が公任と女御の贈答歌（四〇二・四〇三）としてみえ、作者を諟子としているところから、それに整合するように詞書を改めたものであろう」と述べている。

（六）

本稿では、『公任集注釈』に従い、元の詞書本文は「女御の御もとより」であったと考え、詞子から歌を詠んだと解した。（持田）

三月許ニワツラフコト侍ケレハ
花薗左大臣ノモトヘタテマツラ
セ給ケル　越後

234　カセヲイトフコヽロハヽナニオトラネト
ワレヲハオシム人ノナキカナ

**【整定本文】**

三月許ニワヅラフコト侍ケレバ、花薗左大臣ノモトヘタテマ
ツラセ給ケル　越後
カゼヲイトフコヽロハヽナニオトラネドワレヲバヲシム人ノナキ
カナ

**【現代語訳】**

三月頃に患うことがありましたので、花園左大臣のもとへ差
し上げなさった　越後
私が風病を厭う気持ちは、花がその身を吹き散らす風を厭うのに劣りませんが、（散る花を惜しむ人が大勢いるのとは違い、）私のことなど惜しむ人はいないことですよ。

**【作者】**越後。生没年未詳。越後守藤原季綱女（和歌色葉）。花園左大臣源有仁の乳母。『今鏡』「御子たち　第八　花のあるじ」では小大進と並んで「名高き女歌詠み」と評され、見事な鎖連歌の付け合いが後々まで賞賛されたことが記される。有仁は詩歌管絃に秀でた風流人であり、越後もその女房としてふさわしい才媛だったのだろう。神祇伯源顕仲勧進の南宮歌合に出詠。「内大臣家越後」の名で『金葉集』に五首入集。なお『尊卑分脈』には三条源氏・刑部大輔定信男の保信の母に「越後守藤原季綱女」とある。また有仁の父輔仁親王は「三宮」と称されたが、『千載集』恋二・七二八番の作者「三宮家越後」、そして『続詞花集』に四首入り、八二五番詞書から三宮に仕えていたと思しい「越後」も、同一人物の可能性がある。《参考文献》関本万利子「勅撰集の女流歌人―花園左大臣家越後」（『学苑』一四七、一九五三年五月）

**【語釈】○花薗左大臣**　→235**【作者】**参照。源有仁。**○カゼヲイトフ**　風の詠まれ方は多岐にわたるが、花や紅葉を散らすものとして詠まれる例は多い。その際は、「さくらばなさかばちりなんとおもふよりかねてもかぜのいとはしきかな」（後拾遺集・春上・八一・永源法師）のように厭う対象とすることが多いが、その逆に「ふく風をなにいとひけむむめの花ちりくるときぞかはまさりける」（躬恒集・一一九）のように肯定的に詠む例も存する。また贈答歌では、「風」に風病の意を掛けて用いられることも多い。例えば『皇太后宮大進集』では、「皇后宮にさぶらひしに、民部卿しげのりまゐられてたちいでて、花みよと侍りしを、かぜの気にや心よからで、と申したりしかば」の詞書に続き、「かぜゆゑにはなをいとふとききつればはるのともとはたれと見るべき」（二〇）の贈歌と、それに対する返歌「花ゆゑにかぜをいとふとせし程にかぜさへはなをいとふ名ぞたつ」（二一）が載る。また「風をいとふはなのあたりはいかがとてよそながらこそおもひやりつれ」（建礼門院右京大夫集・七一）も、病で花見に加われなかった折の贈答の返歌である。当該歌の「風」にも風病の意が掛けられており、「私が風病を嫌がる」と「花が風を嫌がる」の二つの内容を

表している。**○コ、ロハ、ナニオトラネド**　「～に劣らねど」という表現が、「わが恋は織女つめにおとらねどあふよをいつとしらずもあるかな」（宇津保物語・八五・行政）、「きみこふるなみだはゆきにおとらねどきえのこりける身こそつらけれ」（行尊大僧正集・一五〇）のように上の句に置かれた場合、「～に比べて劣らないが」と上の句で共通性を述べつつ、下の句で差異を示す構造になる。当該歌においては、風を厭う心が花と共通することを上の句で示し、しかし一方、人に惜しまれるという点では花と自分は異なるのだと下の句で述べる。花を擬人化し、その心を詠う例としては、「うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん」（後撰集・春下・九二・深養父）、「はるかぜはふくともちるなさくらばな花のこころをわれになしつつ」（高陽院七番歌合・二・通俊）等がある。ただし当該歌の「に」を、比較する基準を示すのではなく、動作・態度の関わる対象を示す格助詞と解釈すれば、「風を厭う心は花に対して感じるのに劣らないが」となり、こちらの解釈も成立し得るか。**○ワレヲバ**　「をば」は、格助詞「を」に係助詞「は」が付き、「は」が濁音化したもの。強調の意を持つ。当該歌では、人々から惜しまれる花と比べて、そうではない「我」を強調し、「私のことなんて誰も惜しんでくれないのです」と拗ねて見せている。**○人ノナキカナ**　結句に置かれることが多い措辞で、「白妙ににほふかきねの卯花のうくもきてとふ人のなきかな」（後撰集・夏・一五四「ともだちのとぶらひまでこぬことをうらみつかはすとて」読人不知）、「くりかへしわれはこふれどもろかづらもろ心なるひとのなきかな」（相模集・五八三）のように、拗ねてみせたり孤独を嘆いたりする際に用いられる例が目立つ。当該歌でもこの型に則して、拗ねた振る舞いを見せている。

**【補説】**花園左大臣源有仁の乳母越後と、その主家たる有仁との贈答歌における贈歌。詞書によると三月、折しも桜花の季節であったため、「風」に風病の意を掛け、風で散る花と病身の自らを引き比べて一首を仕立てている。病による心細さのせいか、我が身を気に掛けて欲しいと言わんばかりの詠みぶりである。【作者】で記した通り、越後は有仁の父輔仁親王の代から三宮家に仕えていた可能性があることに加え、有仁家を代表するような才媛女房であった。乳母という立場や当該歌の内容を鑑みると、越後と有仁とは極めて親しく、気心の知れた関係であったことが推察される。

（小林）

返シ　　左大臣

235　カセハヤミキミヲソワレハオシミツル
　　チルトモハナハマタモサキナン

**【整定本文】**　返シ　　左大臣

カゼハヤミキミヲゾワレハヲシミツルチルトモハナハマタモサキナン

**【現代語訳】**　返し　　左大臣

風病が重いようですので、私はあなたのことこそ気がかりで、大切に思っています。風が激しいと花は散るでしょうが、花は散ったとしても再び咲くでしょう。（しかし、あなたはこの世にたった一人のかけがえのない存在なのです。）

**【作者】**源有仁。康和五年（一一〇三）生、久安三年（一一四七）没。父は後三条天皇第三皇子輔仁親王、母は源師忠女。白河院の

（八）

猶子となり、院の御所で元服したが、元久二年（一一一九）源氏姓を賜って臣籍降下した。以後は順調に昇進を続け、二十歳の若さで内大臣となる。天承元年（一一三一）に従一位右大臣、保延二年（一一三六）に左大臣となる。久安三年（一一四七）正月、病により官を辞し、二月に出家、同月没した。花園左大臣と号す。眉目秀麗で詩歌管絃に秀でており、光源氏に例えられることもあった（『今鏡』）。『金葉集』以下の勅撰集に二十一首入集。有職故実書『春玉秘抄』『秋玉秘抄』、日記『花園左大臣有仁公記（園槐記）』などを著した。《参考文献》加畠吉春「源有仁年譜―〔付〕有仁とその文学サロン」（『平安朝文学研究』五、一九九六年一二月）、森下要治「院政期貴族社会の音楽と文学―源有仁の音楽活動をめぐって―」（『尾道市立大学日本文学論叢』九、二〇一三年一二月）、梅田径「『今鏡』における源有仁家の描き方―鎖連歌記事とその情報源―」（『六条藤家歌学書の生成と伝流』第三部第三章　勉誠出版、二〇一九年）

**【語釈】○カゼハヤミ**　形容詞「はやし」の語幹に、原因・理由を表す接尾語「み」がついたもの。ここでの「はやし」は、激しい・強いの意。例歌として、「風はやみよしのの山の桜花さかぬに春のすぎぬてふらん」（元輔集・三）、「かぜはやみあきもなかばになりぬればちりくることのはをのみぞまつ」（江帥集・四八八）などがある。贈歌と同じく「風」には風病の意が掛かっている。**○キミヲゾ**　「ぞ」は強意の係助詞。あなたの方が花よりもずっと大切なのだ、と強調している。**○ヲシミツル**　二句目「ぞ」を受けた「つ」が係り結びで連体形となっている。「惜し」には、いつくしむ・残念だ・捨てがたい等いくつかの意味があるが、ここでは「大切に思う・いつくしむ」の意で解した。**○マタモサキナン**　「なん」は完了の「ぬ」未然形に推量「む（ん）」がついたもの。確述を表し、「きっとまた咲くだろう」の意。類例に「枝しあらば又もさきなむ風よりも折る人つらき山ざくらかな」（久安百首・二一四・教長）、「すぎにけるわがさかりをぞ思ふべきうつろふ菊は又もさきなん」（清輔集・一九〇）など。

**【補説】**越後の歌に対する有仁の返歌。人々から惜しまれる花と引き比べ、我が身など誰も惜しんでくれないだろうと嘆く越後詠に対し、私にとっては花よりもあなたの方が何よりも大事なのだと返す。乳母との強い紐帯が読み取れる一首である。なお語彙の異同が大きいため【他出】としては掲げなかったが、同じ折、もしくは同じ歌と思しき詠が『今鏡』と『玉葉集』に次のように収められている。なお『今鏡』の引用箇所は、有仁の出家と死について語った後の一節である。

○『今鏡』御子たち　第八　月に隠るる山の端（引用は、竹鼻績『今鏡（下）全訳注』講談社、一九八四年）

越後の乳母、風いたみけるころ、花にさして、

われはただ君をぞ惜しむ風をいたみ散りなむ花はまたも咲きなむ

と詠み給ひけるを、乳母はつねに語りつつ恋ひ申しける。

○『玉葉集』巻十四・雑歌一・一八七四

乳母のかぜおこりてわづらひ侍りけるに、花につけてつかはしける　　花園左大臣

われはただ君をぞをしむ風をいたみちりなん花は又もさきなん

右の『今鏡』と『玉葉集』の歌は同一だが、この二首と『言葉集』収載歌とは異同がある。また詠歌状況も微妙に異なるため、有仁詠は『言葉集』と『今鏡』『玉葉集』とで異なる解釈も可能である。『言葉集』が収める贈答歌の形では、花と人（越後）とを対比させる越後詠があるため、その返歌である有仁詠も、「花よりもあなたの方が大切です」と花と人を対比させた解釈になるだろう。しかし『今鏡』『玉葉集』では越後の贈歌がないうえ、有仁詠が咲いている花に付けて贈られているため、有仁詠は「去年散った花もこうして再び咲きました。同じように、あなたも再び元気になるに違いありません」のように解釈することも可能か。なお『今鏡』では、越後が有仁の死後、事につけこの有仁詠のことを語りつつ、亡き主君を追慕していたことが記されており、ここからも二人の強い絆が見て取れる。（小林）

□（人歟）〳〵クシテ白河花ミ侍ケルニ
女車ノ心アルサマナリケルカ
ヒネモスニナカムルケシキ
ナリケレハツカハシケル
顕□（昭歟）法師

236　ケフハマツキミカニホヒノミニシミテ
ハナハヨソナルコヽチコソスレ

**【本文に関する注】**作者名「顕昭」、重書。「顕」の下は「為」か。

**【整定本文】**

人〳〵グシテ白河花ミ侍ケルニ、女車ノ心アルサマナリケルガ、ヒネモスニナガムルケシキナリケレバ、ツカハシケル

顕昭法師

ケフハマヅキミガニホヒノミニシミテハナハヨソナルコヽチコソスレ

**【現代語訳】**

人々と連れ立って白河の花を見ました折に、女車で風雅なたたずまいであるのが、一日中（花を）眺めている様子だったので、言い遣りました　顕昭法師

今日は（花よりも）何よりも先にあなたの美しさが身にしみて感じられ、（ここに来た本来の目的である）桜の花の方は（私の関心とは）無関係な所にある気持がします。

**【作者】**顕昭→299【作者】

**【語釈】**○人〳〵グシテ　「具す」は連れ立つ意。幾人かが誘い合わせ連れ立って観桜に出かけることに用いた例は、「人人あまたぐしてはな見ありきに」（金葉集・雑下・六〇六）、「人人あまたぐして花見侍りしに法勝寺にて」（頼政集・四四）、「白河にて殿上人人はなみ侍りけるにいざなひぐして」（師光集・一九）等の詞書に見える。当歌詞書の「人〳〵」が具体的にどのような人物かは不明。風雅を共にする歌人仲間であったか。○白河　京都の北東部、鴨川と白川に挟まれた地域で、北は近衛大路末、南は三条坊門小路末に限られた、東西約一・五キロメートル、南北約一キロメートルを呼ぶ（美川圭「京・白河・鳥羽」、元木泰雄編『院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年）。現在の京都市左京区の一部。貴族の別業地であったが、院政期には六勝寺が建立された。早くから桜の名所としても知られ、「たかくらの一宮の女房花みに白河にまかれりけるによみはべりける」（後拾遺集・春上・一一九・

（一〇）

伊賀少将）、「賀茂重保人人いざなひて、白河のはなみに侍りけるによめる」（月詣集・一八二・俊恵）、「白川の花のさかりに、人のいざなひ侍りしかば、見にまかりてかへりしに」（西行上人家集・一二一）等、白河へ花見に出かけて詠歌したことを示す詞書は多い。**○女車**　宮中の女房等が外出の際に用いる牛車。男性用よりも少し小型で、簾の下から下簾の裾を垂らす。「まつり見ける女車よりかはほりをおとしたりけるをとりて、かきつけてつかはしける」（続詞花集・九七〇・道信）、「さがのにまかりて、女ぐるまあひたるに、かくいふ」（江帥集・二七九）、「あめこちたくふりし日、しらかはにはなみありきはべりしに、法しようじの常行だうのかたに、いみじくぬれたる女ぐるまのみるがりいひやる」（実家集・四七）等の詞書が諸集に見え、物見等で外出した女性に対し、それを見かけた男性が言い掛ける契機を作る装置ともなった。**○心アルサマ**　行き届いた心用意を感じさせて風情のある様子。乗車する人物の風流心や教養を示唆する。**○ヒネモスニ**　一日中。**○キミガニホヒ**　あなた（女車に乗る人物）の魅力。「視覚的な美しさ」よりも、ここでは「女車ノ心アルサマ」から感じ取れる女性の教養やセンス等、全体の雰囲気のすばらしさを指す。「君が匂ひ」は十例ほどが残るのみの稀少な措辞である。具平親王が正月に来訪した藤原公任に対し翌日贈った、「あかざりし君がにほひのこひしさに梅の花をぞけさは折りつる」（拾遺集・雑春・一〇〇五。拾遺抄・三七七、公任集・一八、為頼集・三一にも入る）が用例として早く、後代の作例も、「あかざりしきみがにほひを待ちえてぞくもゐのさくら色をそへける」（源家長日記・二・通親）のように、具平歌の影響が見られる。236番歌においても具平歌が意識されていると考えられ、同歌初句の「あかざりし」は取り込まれてはいないものの、「見ても見ても堪能し尽くせないあなたの雰囲気のすばらしさ」の意を籠めたのではないか。**○ミニシミテ**　すばらしさをしみじみと感じて。「匂ひ」と「染み」が縁語となり、女車に乗る女性の魅力が、詠作主にとって染まり付く香りのごとく深い印象を残したことを示す。**○ハナハヨソナル**　「よそ」は、自分とは無関係である意。桜の花を観賞するためにやって来たが、自分の関心は花とは別の対象に移ったことを示す。この句には、顕昭の養父顕輔の、「かづらきやたかまの山のさくら花雲井のよそにみてや過ぎなん」（千載集・春上・五六）が意識されているか。顕輔歌は、愛着の対象たる桜の花が遙かに手の届かない高みに咲く様を、「自分とは無関係だ」の意で「よそ」と表現したが、236番歌は「よそ」の意を一捻りさせて、桜が愛着の対象範囲から外れたことを表現する。詠歌史に学んだ措辞表現に新たな趣向を加えて珍しさを出そうとする顕昭の工夫が見て取れる。

**【補説】**「匂ひ」は原義的には「つやつやと映える美しさ」を示す語で、和歌においては、「よそながらをしきさくらのにほひかなたれわがやどの花とみるらん」（後拾遺集・春上・一一五・坂上定成）、「春をへてにほひをそふる山ざくら花はおいこそさかりなりけれ」（千載集・春上・七一・仲正）のように、桜の花の美しさを示すことも多い。236番歌ではこの用法を踏まえて、「花見に来たのだから、本来なら桜の美しさを堪能するところなのに、花ならぬあなたの風情に心惹かれた」と詠む。なお、「花」について「身にしむ」と表現した例としては、俊成が別雷社歌合の「花」題で詠んだ、「身にしめしその神山のさくら花雪ふりぬれどかはらざりけり」（長

秋詠藻・四七四、月詣集・一〇九）が早い。

物見や法会聴聞等のために車で外出した女性に対して、これを見かけた男性が歌を詠みかける話は、例えば、『伊勢物語』九十九段に「むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の、下簾よりほのかに見えければ、中将なりける男のよみてやりける」と見える（『大和物語』百六十六段にも同話が載り、女性が乗車していたのは「よしある車」と記される）。『後撰集』雑二には、「かすがにまうでける道にさほ河のほとりに、はつせよりかへる女ぐるまのあひて侍りけるが、すだれのあきたるよりはつかに見いれければ、あひしりて侍りける女の、心ざしふかく思ひかはしながら、はばかる事侍りて、あひはなれて六七年ばかりになり侍りにける女に侍りければ、かのくるまにいひいれ侍りける」の詞書で、閑院左大臣（藤原冬嗣）が愛情を残しながら別れた女性との思いがけない再会に際して贈った作が載る（一一八一）。【語釈】「女車」項に掲げた用例をも勘案するならば、車に乗る女性を見かけて心を動かした男性が交渉を試みようとする場面設定は、物語の発端を形づくる一つの型として継承されてきたものであり、236番歌も真率な恋心によるというよりは、文学的な伝統を踏まえた戯れであったと考えられる。なお、平安末期から鎌倉初期にかけての歌集詞書において、恋愛に関する状況をことさらに歌物語のように表現する傾向のあったことについては、浅田徹「中世歌物語というジャンルについて―平安末期から鎌倉中期の動向」（浅田徹他篇『和歌史の中世から近世へ』花鳥社、二〇二〇年）に指摘がある。

（中村）

返　　建春門院右衛門佐

237　サキニホフハナノアタリニタツネキテ
　　ウツルコヽロノホトヲシリヌル

**【整定本文】**　返　　建春門院右衛門佐

サキニホフハナノアタリニタヅネキテウツルコヽロノホドヲシリヌル

**【現代語訳】**　返歌　　建春門院右衛門佐

美しく咲き誇る桜の花の近くまで尋ねて来て、桜に惹かれる（私自身の）気持の深さを知ったことです。美しく咲く桜を見に来て（私に声を掛けたりする）あなたの心がどんなに移り気なのかその程度が分かりました。

**【作者】**建春門院右衛門佐。三井寺の法眼長慶（藤原教長男）の女。母は藤原顕良（忠家男）の女。高松院（二条天皇后）にその中宮時代から出仕し、後に建春門院に仕えた。『たまきはる』の「女房名寄」に「右衛門佐　高松の院の女房。長慶得業が女。このごろの宗経の中将の母なり」と見える。禅智法印（藤原俊忠男）との間に生んだ女も、「左京大夫」の名で建春門院に仕えた。仁安三年（一一六八）十月に藤原実国が主導して催された大井川への観楓逍遙に加わり和歌を詠んだ（大阪・金剛寺蔵『宝筐印陀羅尼経料紙和歌』紙背）。『古今著聞集』「和歌」に、藤原宗家の北の方であった「後白河院女房右衛門佐」が、夫の疎遠を嘆いて詠歌したところ、関係が修復されたという説話が載り、後白河院にも兼参していたらしい。建久六年（一一九五）に行われた藤原良経主催の女房八人百首（六百番歌合の後番百首）の作者となり、この折の作が『新古今集』に入集する。元久二（一二〇五）年正月の

（一二）

朝覲行幸に際して歌を献じており（源家長日記）、この頃までの生存が確認できる。『新古今集』に一首入集したほか、勅撰集に計八首入集。『続詞花集』等にも入る。ほとんどの和歌事績は「高松院右衛門佐」の名で残るが、文治二年歌合にのみ「前建春門院右衛門佐」の名で出詠する。《参考文献》久保田淳「高松院右衛門佐とその周辺」（『中世和歌史の研究』明治書院、一九九三年）

**【語釈】○サキニホフ**　色美しく咲き誇る。『万葉集』から用例が見える。「桜の花」の様態として用いた例に、「さきにほふ花のあたりは春ながらたえせぬやどのみゆきとぞみる」（千載集・春上・五二・藤原基忠）、「さきにほふ花のけしきをみるからに神の心ぞ空に知らるる」（新古今集・神祇・一九〇六・白河院）がある。

**○タヅネキテ**　探し求めてここまでやって来て。【補説】参照。

**○ウツルコヽロ**　「花の色にうつる心はやまざくらかすみのまより思ひそめてき」（隆信集・四七三）のように、「心惹かれる」意で用いる場合と、「菊の花うつる心をおくしもにかへりぬべくもおもほゆるかな」（後撰集・恋四・八五二「わすれ侍りにける女につかはしける」読人不知）、「はなごとにうつるこころのいろにいでてひとのあだなをあきやたつらん」（頼宗集・四四）のように、「心変わりする」「移り気である」意で用いる場合とがある。ここでは、詠者の桜の花への耽美を前者の意で、作者への恋心を詠んでよこした顕昭の姿勢を後者の意で表現する。

**【補説】**三句「尋ね来て」の動作主体は、詠者（建春門院右衛門佐）とも、返歌の対象（顕昭）とも解しうる。四句「移る心」の意は【語釈】に示した通りで、詠作主体がその「ホドヲ知」った対象として、二通りの内容が籠められている。尋ね求めてきた桜を前にして、詠者が再認識した桜に強く惹かれる自らの心の意と、歌を詠みかけ恋心を示した顕昭に対し切り返して述べた「移り気なあなたの心」の意である。三句「タヅネキテ」はこの下句の二つの内容と連関すると解し、表向きは桜の美しさへの耽美を詠むと見せつつ、その裏側に顕昭への親しみを込めた揶揄を潜ませた作と捉えて訳出した。なお、顕昭が「君が匂ひの身にしみて」と言い掛けたのに対し、右衛門佐歌では「匂ふ」のは自分ではなく「花」であると切り返し、さらに「移る心」の表現によって、贈歌の「身」「しむ」に対応させるなど、知的技巧を凝らしている。237歌内においては、「ニホフーウツル」が「ハナ」を結節点とする寄せを形成するが、236歌との対応においては、「ニホヒ」が「ミニシミ」たとする顕昭の真率な告白を、「ウツルコヽロ」だとして無効化する機能を負う。右衛門佐の方も擬似の恋愛と知的な会話を楽しんでいると言える。

（中村）

（一三）

# A Commentary on “Genyo shu” (5)

ANAI, Jun　KOBAYASHI, Kenta　NAKAMURA, Aya　MOCHIDA, Rei

キーワード：和歌、平安末期、私撰集、惟宗広言、雑上部
Keywords　：waka, late Heian era, shisenshu (personal collection of poetry), Koremune no Hirotoki, first half part of miscellaneous subjects